

復興立ち上がる観音様

東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県気仙地方(陸前高田市、大船渡市、住田町)に点在する「気仙三十三観音霊場」の復興を目指す。東京都内の僧侶らでつくる社会福祉委員会(通称・ひとさじ)の会が活動を続けている。震災から11日です。仏教者の立場で、津波の被害を受けた地域をもう一度元気にさせたいとしている。

気仙三十三霊場 僧侶ら取り組み

都内の路上生活者らに、おにぎり配り。観音菩薩が33の姿に身をかわし、震災直後から気仙地方などの避難所や仮設住宅で炊き出しを続けてきた。しばらくして衣食が満たされると、被災した人たちは「亡き人」を思っ、心静かに過したい」と訴え始めた。

「そんな声に耳を傾けているうち、地域の人たちが親しんできた気仙三十三観音霊場を知ったのです」と会の事務局長で浄土宗僧侶の吉水五郎さん(34)は

「祈りの道」紹介

「大震災前のこの風景を



震災後に見つかった要書観音堂の観音像は、ひとさじの会の支援で修理され東京の回院の公開帳で公開される。岩手県陸前高田市気仙町



気仙三十三観音霊場

18世紀初めの江戸期に定まったとされ、札所をすべて巡ると187日の旅になる。曹洞宗など宗派に属する寺院のほか、個人や地域で管理する神仏習合のお堂などもまちまち。九つが被災した。巡礼などの問い合わせは陸前高田市観光物産協会(0192・545011、ホームページ＝http://www.33ku.jp/kanko/)。

HPに巡礼ガイド■東京で「出張」公開

取り戻し、観光客を再び呼び込むことで経済的にも気仙地方を支えたい。ひとさじの会の動きは素早かった。

昨年3月から札所を一つひとつ巡り、どれほどの被害だったかを調べた。地元行政やNPOなどに、霊場を「祈りの道」と名づけ全国に広めようと呼びかけた。震災前に観光物産協会がつくった巡礼ガイドを改訂し、会のホームページ(<http://kesenkanon.jindo.com>)に掲載。巡礼者向け朱印帳を用意した。

首都圏でのPRも予定している。長野・善光寺の一光三尊阿彌陀如来などを東京・西国の回向院に迎え公開する公開帳(4月27日～5月19日)に、気仙霊場から体の観音像を招き公開する段取りを整えた。いずれの観音像も、大津波に耐え奇跡的に残った。

「講」復活の願い

うち、4番札所の要書観音堂は、陸前高田市の南に広がる広田湾で漁を営む要谷漁港にあった。海辺の観音堂を代々守ってきたのは、近くの熊谷史郎さん(56)一家だ。2年前の大津波で観音堂も自宅も流された。自宅は被災する1週間前に改築を終

えたばかり。荒涼とした光景と住宅ローンが残った。

ところが、震災から2週間ほどして、お堂にまじっていた観音像が泥の中から見つかった。仮設住宅で暮らす熊谷さんは自らに言い聞かせるように話す。「自分の代で、お堂を終わりにするわけにはいかなのです」

集落をろって高台に移転することは決めたものの、海を見て暮らしたいし、新居のそばに、ほんのややかでもここからお堂を建て、津波に耐えた観音像をまつりたい。望みをかなえるには、これから二重の住宅ローンを負担しなければならぬ。

「つむ」と、妻の恵美子さん(51)はその先の希望を語る。毎年1月17日には、観音堂に地域の女性たちが集まってお祈りしたり、おしゃべりしたりする観音講を開いてきた。「移転した先でも観音講を復活させたいのよ」

ひとさじの会の吉水さんは「霊場は、いまも地域の人びとの心の中にとどまっています。心の中にとどまることが大切です。そして、今後は観音の祈りを捧げる大切な場となり、訪ねてくる方にとって新たな縁をつむぐ場にもなることでしょう」と話している。

(編集委員・森本俊司)